

平成18年度詳細分布調査に伴う遺跡範囲確認調査報告書

中祖遺跡範囲確認調査報告書

2007年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、平成18年度詳細分布調査事業として、大田市温泉津町福波地内の中祖遺跡の範囲確認調査を行いました。この遺跡では石見部では確認例が少ない瓦葺き礎石建物跡が明らかとなっており、寺跡または官衙跡など公的な施設であった場合、遺跡が広い範囲に広がることが予想されたことから、将来的開発との調整に備えて範囲確認調査を実施したものです。

その結果、調査地点がちょうど海岸砂丘の縁辺部に当たっており、古代の礎石建物跡は広がらないことが判明しましたが、クロスナと呼ばれる遺物包含層が2枚確認され、縄文土器をはじめとした遺物が出土しました。山陰沿岸には江津市と浜田市にまたがる大平山遺跡（波子遺跡）に代表されるような海岸砂丘に分布する縄文時代の遺跡がありますが、今回の発掘調査によって中祖遺跡もそうした遺跡の一つであることを確認することができました。

本書にまとめたこうした成果が、大田市並びに島根県の豊かな地域史像を構築する上で一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に当たりご協力いただきました地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

島根県教育委員会教育長
藤原義光

例　　言

1. 本書は島根県教育委員会が平成18(2006)年度に国庫補助事業として実施した中祖遺跡の範囲確認調査の記録である。
2. 本書で報告する遺跡は次のとおりである。
島根県大田市温泉津町大字福光ハ494-7番地 中祖遺跡
3. 調査組織は次のとおりである。
事務局 ト部吉博(埋蔵文化財調査センター所長)、坂本憲一(同総務G課長)、宮澤明久(同調査第2G課長)、塙野由美子(同総務G主幹)
調査員 角田徳幸(同調査第2G主幹)、園山暢男(同教諭兼主事)
調査補助員 油利 崇(同臨時職員)
4. 本書のうち、挿図中の北は測量法による平面直角座標系X Y座標(日本測地系)、第III座標系のX軸方向を指している。
5. 本書に掲載した実測図の作成・添書は調査員・補助員が行ったが、縄文時代の石器は種田陽介が実測した。写真は角田徳幸が撮影した。
6. 本書の執筆と編集は角田が行った。
7. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

第1章　調査に至る経緯と経過.....	1
第2章　遺跡の位置と環境	
第1節　遺跡の位置と環境.....	1
第2節　福波小学校所蔵の遺物.....	2
第3章　調査の概要	
第1節　調査区の配置.....	6
第2節　第1トレーニングの調査.....	6
第3節　第2トレーニングの調査.....	12
第4章　小結.....	13
福波小学校所蔵遺物観察表.....	15
中祖遺跡出土土器・陶磁器観察表.....	15
写真図版.....	17

第1章 調査に至る経緯と経過

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて平成17(2005)年度より一般国道9号改築工事(仁摩温泉津道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施している。このうち、大田市温泉津町福波地内では福波第2高架橋の建設に先立って平成17年4月にトレンチ調査を行ったところ弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦・陶磁器・羽口などが出土して遺跡の存在が明らかとなり、小字名をとって中祖遺跡と命名した。本調査は橋脚の建設地点を対象としP2橋脚(I区)は平成17年10月、P3橋脚(II区)は平成18年4月に実施した。P1橋脚(III区)については事業地に大田市立福波保育園があったため、移転・建物の撤去を待って平成18年6月から発掘調査し、この地点で奈良時代後半から平安時代に跨まれた瓦葺きの礎石建物跡1棟が検出された。

古代の瓦葺き礎石建物跡は石見地域では確認例が少ないとから中祖遺跡は地域史において重要な遺跡であると判断されたため、島根県教育委員会では事業者である国土交通省松江国道事務所と協議を行い、橋脚部分を含め掘削が及ぶ660m²を新たに調査対象とした。

一方、中祖遺跡が古代の官衙または寺院であった場合、遺跡が広範囲に広がる可能性も考えられたことから、事業地北側部分について文化財側で遺跡の範囲確認調査を行って、将来の開発との調整に備えることとなった。

範囲確認調査は平成18年7月にP1橋脚の本調査地点(III区)北西側に2本のトレンチを設定して実施した。第1トレンチは海岸から続く砂丘の末端部に当たっており、2枚のクロスナ層と縄文上器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器が検出された。第2トレンチは丘陵裾の平坦面で、崖築堆積物に掘り込まれた土坑と土師器・須恵器・陶磁器が僅かに出土した。調査の結果、古代の瓦葺き礎石建物跡は西へは広がらないことが明らかとなったが、砂丘のクロスナ層と縄文時代から近世にわたる遺物が出土したことから、遺跡は北西側へと続くことが確認された。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

中祖遺跡は島根県大田市温泉津町大字福光に所在する。福光地区は明治22(1889)年の町村制施行時には邇摩郡福光村とされたところで、昭和26(1951)年に邇摩郡福波村、昭和29(1953)年に邇摩郡温泉津町となり、平成17(2005)年には大田市と合併している。

遺跡は大江高山(標高808m)から西へと流れる福光川の谷底氾濫原と、日本海沿いに形成された砂丘が接するところにある。凝灰岩質岩石よりも標高70~80mほどの丘陵地南側裾部の緩斜面に立地しており、砂丘後背湿地から見るとその北側縁辺部に位置する。後背湿地は次第に乾燥して耕地化されたと見られるが、P3橋脚の調査区(II区)では平安時代後半頃と見られるヤナギ類の立ち株が検出されたことや花粉分析の結果から、この頃までには湿地ではあるがシダ類が生育できる程度に乾燥した草地環境となっていたと考えられる。

中祖遺跡の周辺地域における遺跡の初見は、久根ヶ曾根遺跡と鳥居原遺跡で縄文時代前期に遡る。海岸砂丘とその縁辺部に立地しており、砂層下の黒灰色層または黒色砂層から土器のほか石斧・石

鐵などが出土した。中期・後期の遺跡は多くないが、砂丘に立地する坂瀬遺跡や尾浜遺跡、善興寺橋遺跡が知られており、引き続き沿岸部を中心に集落が展開する。

縄文時代晚期から弥生時代前期にかけては坂瀬遺跡・川向遺跡・五丁遺跡群・埋葬遺跡などが知られている。沿岸部や少し内陸に入った地点で確認されており、当地域にも初期の水稻耕作がいち早くもたらされ、広がったことが窺える。弥生時代後期になると波米浜遺跡で方形貼石墓計13基が確認されている。多量の供献土器の他、銅鏡・鉄鏃なども副葬されており、農耕集落を率いるとともに他地域との交流も行った有力者像が窺える。

古墳時代前期の大形古墳は知られていないが、安養寺1号墳がこの頃のものと見られる。長辺12mほどの方墳に箱式石棺をはじめとする4基の埋葬施設が設けられており、こうした古墳が集落ごとに点在することが考えられよう。後期になると明神古墳のように大形横穴式石室に家形石棺を納め、円頭大刀や銅碗などを副葬した有力な古墳が出現する。周辺では横穴式石室をもち双龍環頭大刀を副葬した鳥居原古墳や、有力農民層の墳墓である倫ノ木谷横穴墓群・矢迫山横穴墓群なども確認されており、仁万周辺が地域の中核となっていったことが窺える。

奈良・平安時代の遺跡は確認例が少ない。『和名抄』によれば瀬摩郡には託農・大国・温泉・杵道・大家・群治の6郷が置かれ、『延喜式』には駅として託農・樟道・江東・江西などの名が見えるが、郡家や駅などに関わる遺跡は不明である。但し、波来浜遺跡では巡方・丸鞆・錢具が一括出土した火葬墓が検出されており、行政組織を支えた官人の存在は窺うことができる。

第2節 福波小学校所蔵の遺物

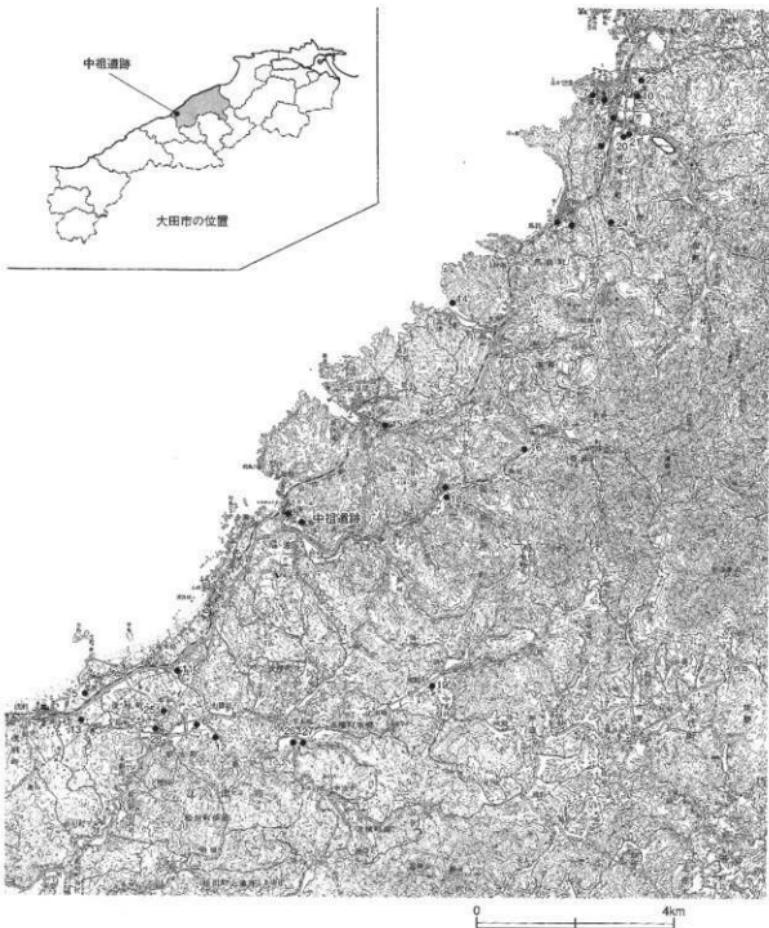
大田市立福波小学校には付近の遺跡より出土したと見られる遺物が保管されている。その多くは出土地点が不明であるが、1949(昭和24)年に済地区で井戸掘りの際に出土した縄文土器(第3図2・4)と、同じく済地区的砂丘で採集された弥生土器(7・8)がある。縄文土器は中祖遺跡の西300mの砂丘上に掘られた井戸より出土したもので、5~6個が発見されたという。福波小学校には2・4の他にも縄文土器が保管されているが、すべてがこの地点出土のものは定かではない。

第3図1は縄文土器深鉢である。復原口径は19cmで口縁は外傾しており、内外面に二枚貝条痕を留める。2は深鉢の口縁部で、ほぼ直立する。外面には縄文が付された粘土帯が凸帯状に貼り付けられ、内面はナデである。3は精製深鉢の口縁部で、端部が肥厚し玉縁状となる。外面には太い沈線で縁取られた磨消縄文が施され、内面はミガキである。4は精製深鉢の頸部で、外面には磨消縄文があり、縄文部分には赤色顔料が塗布されている。内面はミガキである。5は磨製石斧である。長さ16.8cm・幅7.7cm・厚さ4.9cmで刃部は丸味を帯びており、一部に成形時の敲打痕がある。

6は弥生土器壺の口縁部で、復原口径16.0cmである。端部を欠くが内傾しており、外面頸部にハケメ、内面はハケメのちナデである。7は壺の頸部で、外面に5条以上の沈線と斜行刺突文が見られる。8は壺の底部で、内外面はミガキ調整、底面には同心円状の圧痕が残る。

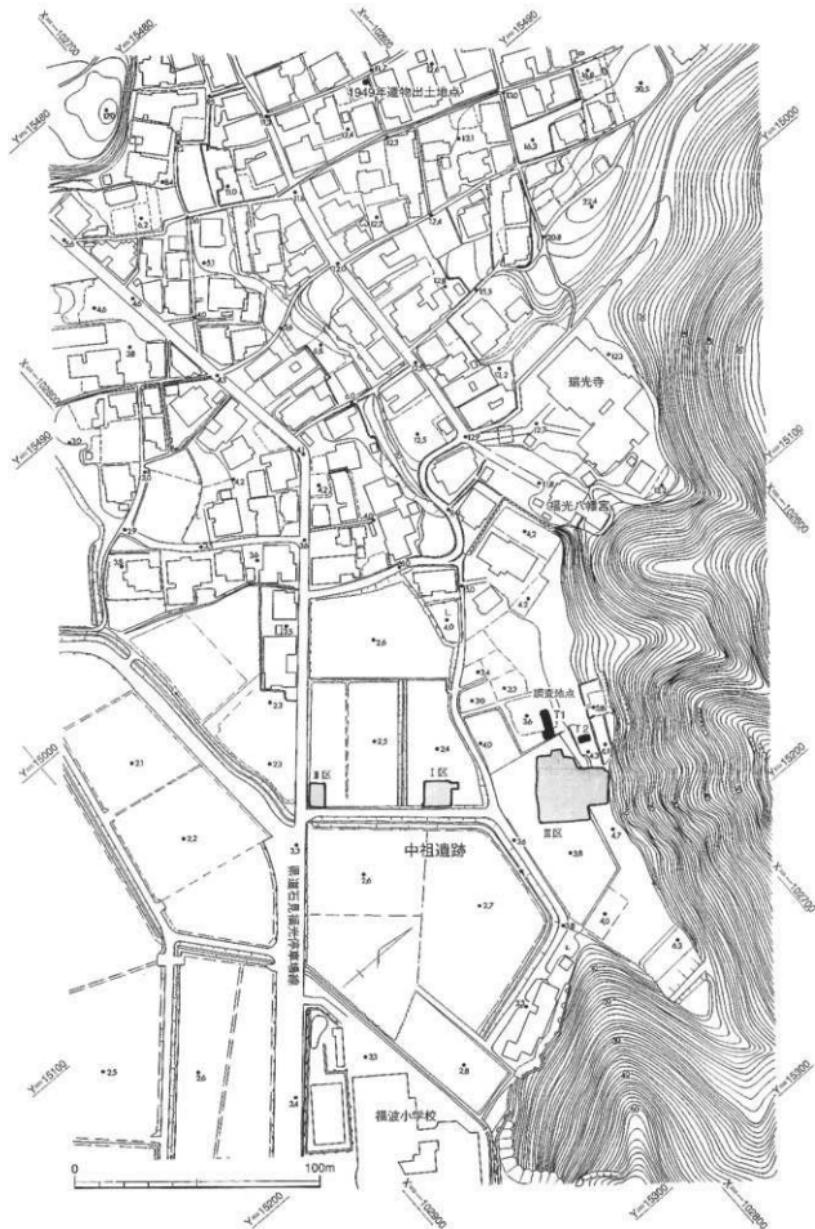
9は平瓦である。須恵質焼成で色調は暗青灰色をしており、凹面に布目圧痕、凸面に縄目タタキがある。端部は面取りされる。10は熨斗瓦または隅切り瓦と見られる。左端は上面の沈線部分で欠損し、上面には4条のヘラ描き波状文がある。胎土は緻密で焼きがよく暗灰色を呈する。

以上の遺物の時期は、1が縄文時代前期、2が中期、3・4が後期前葉、6・7は弥生時代後期前葉、9は奈良・平安時代と考えられる。2・4・7・8から済地区的砂丘遺跡は縄文時代中期・後期と弥生時代後期前葉に営まれたものと見られる他、9は中祖遺跡付近で採取された可能性もある。

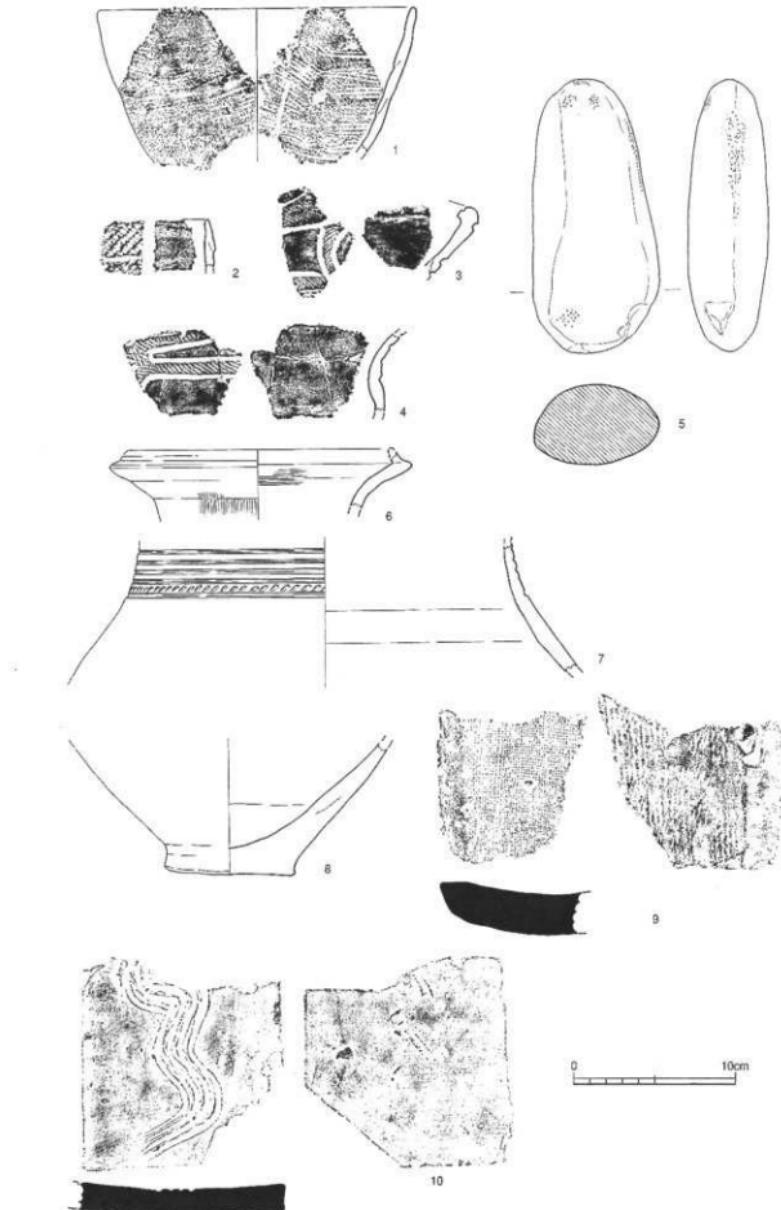


番号	遺跡名	概要	番号	遺跡名	概要
1	漢道跡	縄文・弥生	15	仮塗道跡	石斧・須恵器
2	久根ヶ曾根遺跡	縄文	16		石斧
3	島居原遺跡	縄文・横穴式石室	17		石斧
4	善明寺横遺跡	縄文・弥生～中世	18		石斧
5	尾浜遺跡	縄文	19		須恵器・土師器
6	埋葬遺跡	縄文・弥生・中世	20	安葉寺古墳群	4基・箱式石棺
7	坂瀬遺跡	縄文・弥生～中世	21	塩ノ丘横穴墓群	横穴墓12基
8	川向遺跡	弥生木製品	22	明持古墳	横穴式石室
9	五丁遺跡群	縄文・弥生～中世	23	矢追山横穴墓群	横穴墓3基
10	大寺遺跡	弥生・古墳～中世	24	ナメラ泊遺跡	古墳中崩～中世
11	波来浜遺跡	弥生墳墓・古代	25	佐古ヶ丘横穴墓群	横穴墓4基
12	高瀬遺跡	弥生～中世	26	神田遺跡	古墳後期
13	大堀遺跡	弥生・古墳	27	二川遺跡	古墳後期
14	湯瀬遺跡	弥生石斧5本	28	都治農協裏遺跡	布目瓦

第1図 中祖遺跡と周辺の遺跡



第2図 中祖遺跡と周辺の地形



第3図 福波小学校所蔵遺物実測図

第3章 調査の概要

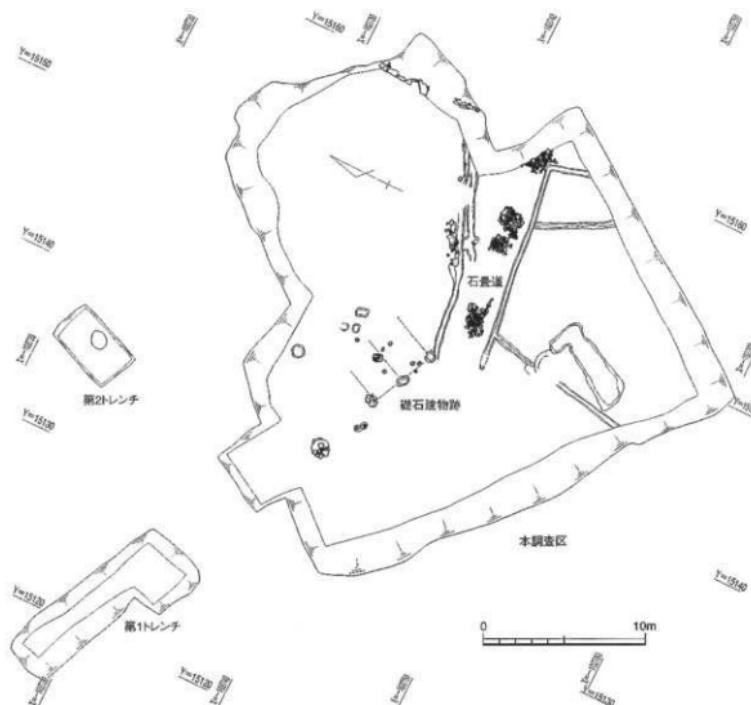
第1節 調査区の配置

中祖遺跡の本調査は橋脚部分を対象とし、調査順にⅠ～Ⅲ区と呼んだ。瓦葺き礎石建物跡が確認されたのは丘陵裾部のⅢ区である。これが寺院または官衙施設の一部であった場合、遺跡が広範囲に広がると見られることから、事業地北側で遺跡範囲確認のためのトレンチを設けた。

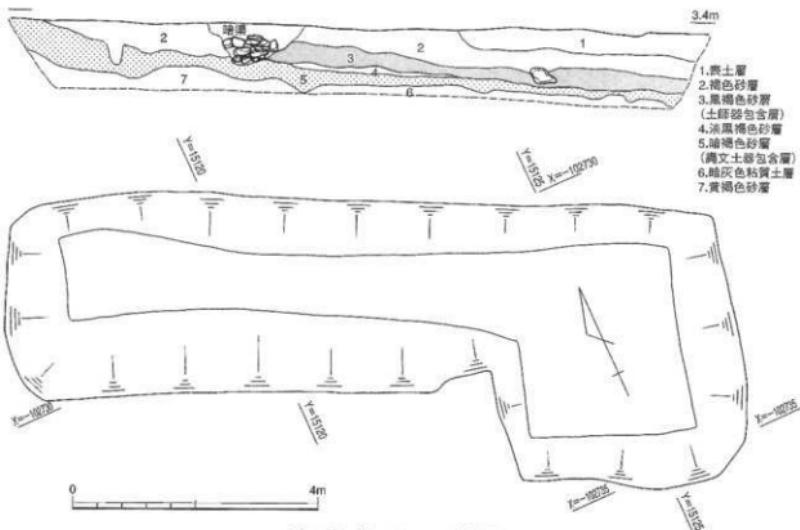
トレンチは礎石建物跡の主軸が南西方向に振るため、これと平行または直交するように設定した。本調査区との距離は第1トレンチが西5m、第2トレンチが北西7mである。

第2節 第1トレンチの調査

第1トレンチは本調査区の西側に礎石建物跡の主軸に平行するように、長さ12m・幅3m、東側の一部は幅5mで設定したものである。上層より表土層(1層)－褐色砂層(2層)－黒褐色砂層(3層)－淡黒褐色砂層(4層)－暗褐色砂層(5層)－暗灰色粘質土層(6層)の順に堆積が見られ、標高2.0～2.4m付近で遺物を含まない黄褐色砂層(7層)に達する。



第4図 中祖遺跡Ⅲ区調査区配置図



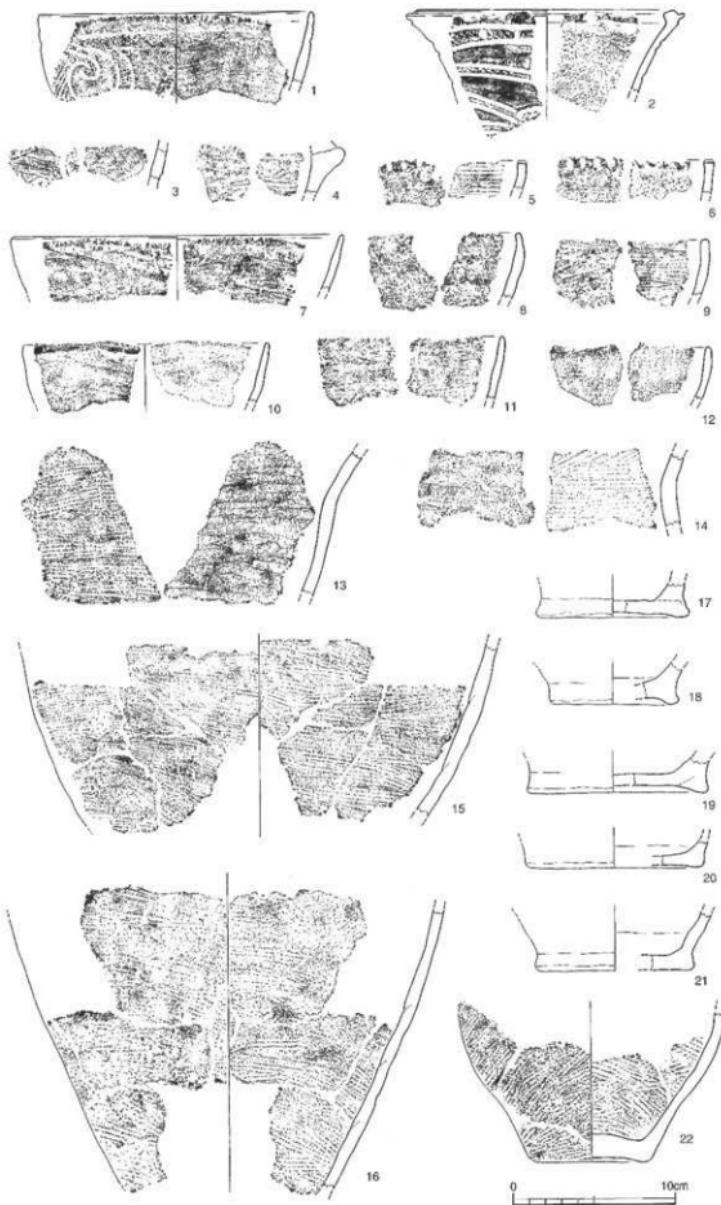
第5図 第1トレンチ実測図

遺物包含層は、黒褐色砂層と暗褐色砂層の2層で、両者とも砂丘側である西が高く東へと傾斜する。黒褐色砂層(3層)は土師器を中心にもみ、上面の標高は2.4~2.9m、厚さは20~30cm前後である。暗褐色砂層(5層)は縄文土器の包含層で、上面の標高は2.2~3.3m、厚さは15~60cm前後である。調査中丘陵側から湧水があったため、遺物の出土状況は記録することができず、包含層ごとに取り上げるに留まった。

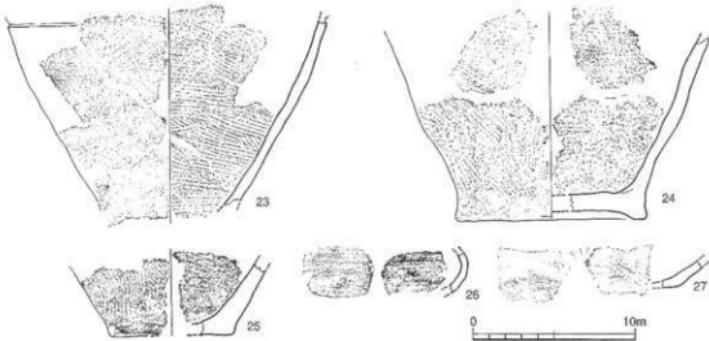
出土遺物としては縄文土器、石器、土師器、須恵器、布目瓦、陶磁器、石鉢がある。

第6図1・2は精製深鉢である。1は復原口径は17.0cm、外面は沈線に縁取られたやや幅のある磨消繩文、内面はミガキである。2は口縁が大きく外反し、肥厚した端部に沈線が入るもので、復原口径15.8cmである。外面は沈線に縁取られた幅の狭い磨消繩文、内面はミガキである。3は粗製深鉢の小片であるが、外面に条痕のち太い沈線文が入り、内面はナデである。4は縁帶文状の口縁をもつ深鉢であるが、端部は欠損する。外面はナデ、内面には条痕がある。5・6は粗製深鉢で、口縁端部に太い刻みが入る。5の外面はナデ、内面は二枚貝条痕、6の外面は条痕、内面はナデである。7~12は深鉢の口縁部で、7は復原口径20.5cm、10は復原口径15.2cmである。7・10・12は内面にミガキが見られるもので、外面は7が粗いケズリのちナデ、10が粗いナデのちミガキ、12が条痕のちミガキである。8・9・11は粗製で、8は内外面にナデ、9・11は外面はナデ、内面は二枚貝条痕である。

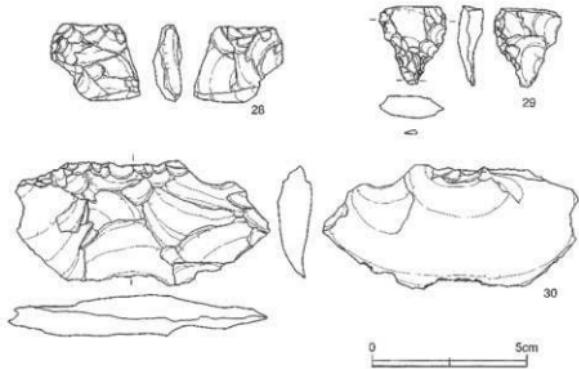
13~16・23は粗製深鉢の胴部である。13・14は口縁に向けて外反するようにやや屈曲するもので、23は外面に沈線が入っている。調整は内外面とも二枚貝条痕が顕著に見られるが、13の内面と14・23の外面はナデである。17~22・24・25は深鉢の底部である。やや上げ底状になるものが多いが、21・25のように平底もある。調整は22・24・25が内外面とも二枚貝条痕で、17・19の内面にも二枚貝条痕が見られる。



第6図 第1トレンチ出土遺物実測図(1)



第7図 第1トレンチ出土土器実測図(2)



第8図 第1トレンチ出土遺物実測図(3)

26は浅鉢の胴部で丸味を帯びる。調整は内外面ともミガキである。27は浅鉢の底部で、平底状になつていることが分かり、内外面ともミガキである。

石器は石核・石錐・使用痕のある剥片・剥片を確認した。石材は肉眼観察であるが、サスカイト・黒曜石・安山岩～流紋岩が見られ、内訳は表1のとおりである。黒曜石剥片はいずれも細かいものであるが、色調は乳白色ではなく黒色をしており、隠岐産の可能性が考えられる。

第8図28はサスカイトの石核で、長さ3.0cm・幅2.5cm・厚さ0.9cmである。切断による打面調整が見られることから石核と考えられ、直接打撃による垂直な加筆で、求心的に剥離している。29は石錐で、石材はサスカイトである。先端部は使用のために欠損しており、長さ2.5cm・基部幅2.2cm・厚さ0.7cmで、両側面に押圧剥離が認められる。30は使用痕のある剥片で、石材は安山岩～流紋岩と見られる。片面にポジティブな剥離面が残ってお

表1 石器一覧表

種別	石材	点数
石核	サスカイト	1
石錐	サスカイト	1
使用痕ある剥片	安山岩～流紋岩	1
剥片	安山岩～流紋岩	1
剥片	黒曜石	8
合計		12

り打点は2ヶ所認められる。打点側の反対面には直接打撃によるプランディング加工があり、下方には使用によってノッチ状になった微細剝離痕が残っている。

第9図31～37は土師器壺である。31は複合口縁で、復原口径19.4cm、口縁端部が面をなしており、肩部にはハケメ、胴部内面はケズリである。32も複合口縁で、復原口径18.8cm、口縁端部はやや丸味を帯び、頸部外面にはハケメが認められる。33は肩部で、外面にはハケメのち擬円線文と斜行刺突文が施されており、内面にはケズリが見られる。34はくの字形に短く屈曲した口縁をもつもので、端部がやや肥厚しており、復原口径11.8cmである。35はやや内湾する口縁をもち端部が肥厚するもので、復原口径12.8cmである。調整は外外面ともハケメのち横ナデである。

36は大きく外反する口縁をもつもので、復原口径12.2cmである。肩部外面はハケメ、内面はケズリである。37は肩部の破片で、外面はハケメ、内面はケズリである。

38は土師器鼓形器台の口縁部で、復原口径19.0cmである。調整は外外面は横ナデ、内面はケズリのちミガキ調整されている。

39～42は土師器高坏である。39は坏部から脚部の破片で、坏部底面に粘土充填と放射状に工具痕が認められる。40は坏部が脱落したもので、上端部に坏部接合時の押圧痕が残っている。調整は筒部外面がハケメとミガキ、内面はケズリのち下方にはハケメが入る。41はやや厚手の脚部で、外外面はナデとハケメ、内面にはケズリが施される。42は筒部に厚く粘土充填されている脚部である。外外面はミガキ、内面はケズリである。

43は土師器低脚坏である。坏部と脚端部を欠いており、調整も不明である。

44～48は須恵器坏蓋である。44は頂部が窪む厚みのあるつまみをもつ。外面には回転ヘラケズリが施され、光沢のある自然釉がかかる。45はボタン状のつまみがつき、外面に光沢のある自然釉がかかる。46は輪状つまみであるが、つまみは細く直立する。外面には灰をかぶる。47・48はともに蓋口縁の端部で、外面に稜がついており、復原口径は47が13.4cm、48は13.6cmである。

49～51は須恵器坏身である。49は口縁が外傾し低い高台が付いたもので、復原口径12.6cm・器高3.9cmである。外面底部を含め回転ナデで調整されている。50は外傾する口縁をもつもので、口縁端部に色調差があることから重ね焼きされたものと見られる。51は無高台の底部で、外面に回転糸切り痕が残る。内面には色調差があり重ね焼きが考えられる。

52～54は須恵器壺または壺である。52は壺の蓋と見られ、復原口径14.2cmである。外面頂部には別個体の一部が付着しており、僅かに自然釉がかかる。53は壺の肩部で、外面は平行タタキのちカキメ、内面には同心円状の当て具痕が残る。54は壺の底部で、平底になっており、外面に回転ヘラケズリが見られる。

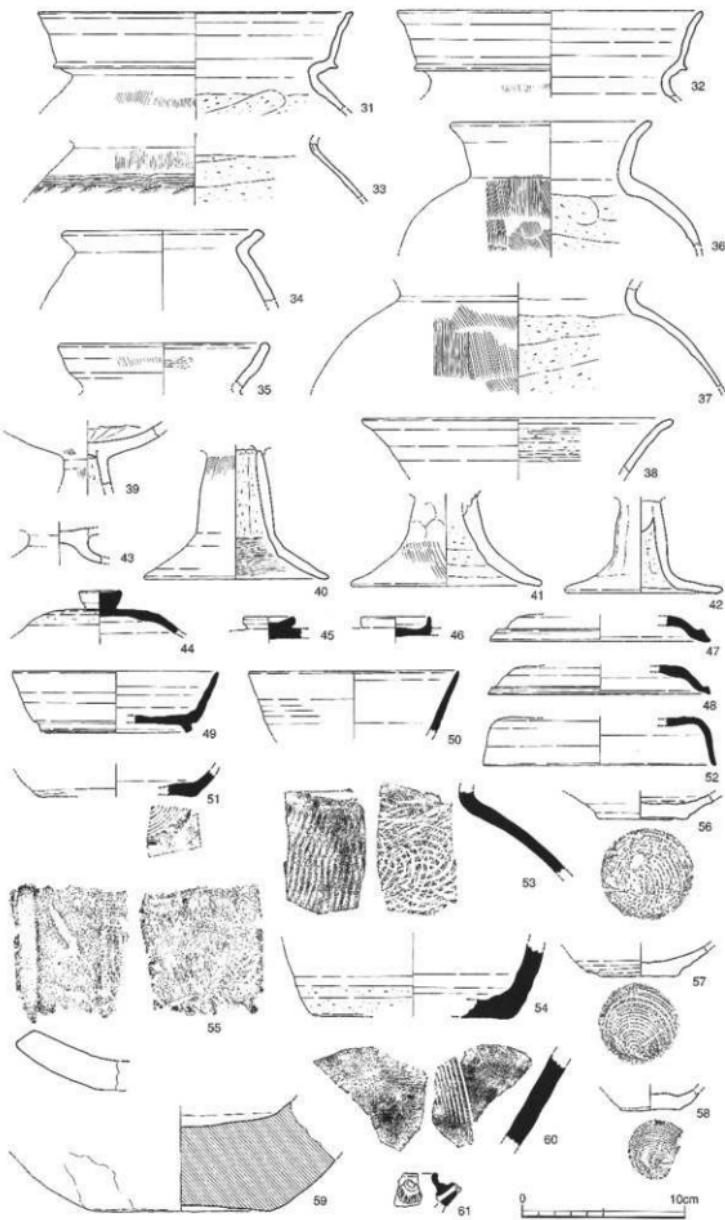
55は平瓦である。凹面には布目が残るが端部側はケズリ調整されており、凸面には繩目タタキが見られる。端部は面取りされ、焼成は不良、色調は灰白色である。

56～58は土師器皿の底部である。底径は56が5.5cm、57が4.7cm、58は3.7cmで大小があり、いずれも外面底部は回転糸切り、内面は回転ナデである。

59は石鉢である。底径10.8cm・底部の厚さは4.8cmで、底面はやや上げ底氣味となっており、内面には使用による摩耗が

表2 陶磁器分類表

種 别	器 種	数 量
龍 泉	碗	2
	壺	3
備 前	擂 鉢	2
瀬 戸	水 滴	1
	碗	7
肥 前	大 鉢	1
	擂 鉢	1
白 磁		3
石 見		3
不 明		4
合 計		27



第9図 第1トレンチ出土遺物実測図(4)

見られる。

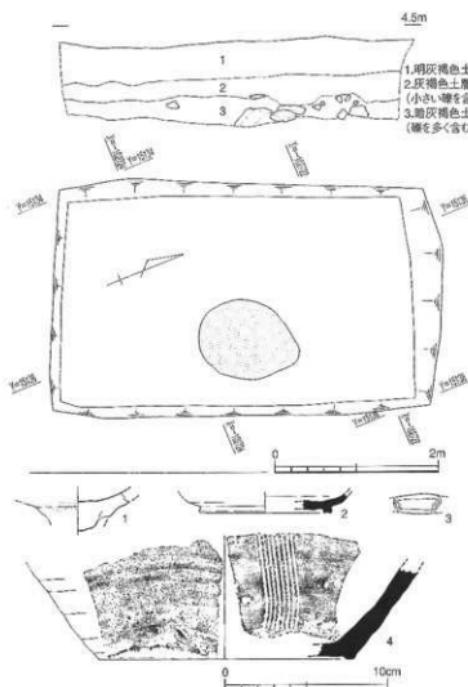
陶磁器は表2に示したように龍泉碗、備前壺・播鉢、瀬戸水滴、肥前碗・大鉢・播鉢、白磁、石見などがあるが、小片が多く図化できるものは少ない。60は備前播鉢の体部で、内面には粗い摺目と下半を中心に顕著な摩耗が見られる。61は瀬戸水滴で花弁状に作られた注口部が付き、外面には緑釉がかかる。

以上の遺物の時期は、1~30が縄文時代後期前葉、31~33・38・40・43が古墳時代前期初め、35・39・41・42が古墳時代中期、44~55が奈良時代のものと見られる。陶磁器は室町時代前半の龍泉碗が古く、江戸時代前半の肥前大鉢・碗がある。

第3節 第2トレンチの調査

第2トレンチは礎石建物跡の北西側に直交する位置に長さ5m・幅3mで設定したものである。上層より明灰褐色土層(1層) - 灰褐色土層(小さい礫を含む: 2層) - 暗灰褐色土層(礫を多く含む: 3層)の順に堆積が見られる。下層ほど大きな礫が多く入っており、トレンチの位置が北側丘陵斜面裾部に当たることから、基本的には崖錐堆積物と考えられる。

造構は暗灰褐色土層(3層)下面から掘り込まれた土坑1基を確認した。土坑は長径1.2m・短径1mほどのやや不整な梢円形をしたものである。今回の調査では上面の確認に留め内部の掘り下げ



第10図 第2トレンチ造構・出土遺物実測図

は行っていない。

出土遺物は少量であったが、土師器、須恵器、土錘、備前が検出されている。

第10図1は土師器高壺の壺部底部片である。壺部側から粘土充填されたことが分かり、外面にはハケメが残る。

2は須恵器壺身である。低い高台が付いており、復原底径は7.9cmである。

3は土錘である。両端が欠損しているが、現状で長さ2.8cm・幅1.2cmである。

4は備前播鉢の底部である。底部はやや上げ底状となっており、内面は横ナデののち摺目、下半は使用のため摩耗が顕著で外面は横ナデである。

以上の遺物の時期は、1が古墳時代中期、2が奈良時代、4は室町時代と考えられる。

第4章 小 結

今回の範囲確認調査は、仁摩温泉津道路建設地内の発掘で明らかになった古代の瓦葺き礎石建物跡の広がりを確認し、将来の開発との調整に備える目的で行ったものである。その結果、第1トレーニチでは奈良時代後半と思われる須恵器や布目瓦、第2トレーニチでも奈良時代の須恵器が出土したがいずれも少量であり、また、古代の建物跡に関する遺構も確認できなかった。したがって、第1・2トレーニチで出土した奈良時代の遺物はⅢ区本調査区側で使用されたもの一部が入ったにすぎないものと見られ、この地点の基盤が砂層であることも考え合わせると、古代の礎石建物跡は西へは広がらないものと判断される。

一方、第1トレーニチでは黒褐色砂層(3層)と暗褐色砂層(5層)の2枚の遺物包含層が確認された。ともに海岸砂丘側である西が高く東へと傾斜しており、第1トレーニチより5m東のⅢ区本調査区では同じ砂層は検出されていないことから、この地点が海岸砂丘の縁辺部に当たるものと考えられる。出土遺物は上層の黒褐色砂層が土師器・須恵器など古墳時代前期・中期、奈良時代後半の遺物を中心とするのに対し、下層の暗褐色砂層は縄文時代後期前葉の遺物を含んでいる。この黒褐色砂層と暗褐色砂層は上層または下層の砂より色調が暗く見えるいわゆるクロスナ層で、砂丘形成の休止期にその表面が草木に覆われたことにより腐植物など有機質の影響を受けて形成されたと見られるものである。

クロスナ層は周辺では、江の川河口の沿岸部に延びる江津砂丘地帯(大平山砂丘地・江津砂丘地・浅利砂丘地・波来浜砂丘地など)に広がっており、中祖遺跡の所在する福波地区はその東に隣接することから同様な立地条件にある。この地域の砂丘の形成問題を自然地理学の立場から検討した角田清美は、江津市と浜田市にまたがる大平山遺跡ではクロスナ層は上下2層あり、下位クロスナ層より2~8m上方で上位クロスナ層を確認している。その年代は下位クロスナ層が縄文時代後期~古墳時代後期、上位クロスナ層は採集した木炭片の炭素年代から10世紀後半から11世紀前半と見ている。また、クロスナ層の形成は江津砂丘地帯で同じように進行しただけではなく、他地域でもその動きが同様に認められることから、下位クロスナ層が形成された頃には日本列島の砂丘地帯は草木に覆われた安定した状態であったことを想定している⁽¹⁾。

中祖遺跡で確認されたクロスナ層は2層が認められたが、一部に厚さ10cm程度の間層を挟む程度で上下に接する位置にある。したがって、2~8mの間隔があったとされる大平山遺跡のクロスナ層とはそのまま対応せず、遺物の時期からすれば下位クロスナ層の様相に近いものと言えよう。1987年に行われた大平山遺跡の発掘調査では、B-3トレーニチで下位クロスナ層に当たる土層が確認されており、この層は土師器を含む上層と縄文後期土器を含む下層に分かれていたと報告されている⁽²⁾。2つの遺物包含層はやはり上下に接する位置にあり、中祖遺跡の状況とよく符合することから、下位クロスナ層は上下2層に細分できるものと見られ、これらは地域的にも広がりをもって分布している可能性が考えられる。江津砂丘地帯の上位クロスナ層は平安時代中頃に形成されものと思われるが、中祖遺跡では削平を受けているためか、または砂丘の縁辺部に位置するという立地条件のためか確認できなかった。

周辺における縄文時代の砂丘遺跡としては、中祖遺跡の西300mのところにある湊遺跡がまずあ

げられる。遺跡の詳細は不明であるが、縄文時代中期と後期前葉の土器が確認されており、福波地区の砂丘には中祖遺跡を含めこの時期の集落が展開していることが明らかである。また、江津市から大田市仁摩町の沿岸部では、前に見た大平山遺跡の他にも久根ヶ曾根遺跡⁽³⁾、鳥居原遺跡⁽⁴⁾、坂瀬遺跡⁽⁵⁾、尾浜遺跡⁽⁶⁾など縄文時代の遺物が出上する砂丘遺跡が点在している。時期は坂瀬遺跡が中期～後期、尾浜遺跡は後期とクロスナ層の時期にはほぼ対応するが、久根ヶ曾根遺跡と鳥居原遺跡は前期初頭と先行するものである。これらの遺跡は多くが詳細不明であり、クロスナ層の形成と集落立地の問題は、今後の調査の進展を待って検討する必要があろう。

第1トレンチ出土の縄文時代遺物は、粗製深鉢を主体とし、僅かに精製有文深鉢、精製浅鉢、石器類を含むものであった。このうち、精製有文深鉢は第6図1と2があるがやや様相に違いがあり、1は単純口縁では磨消縄文の幅がやや広く渦巻き状のJ字文の端部が入り組み状に絡んでいるのに対し、2は口縁が大きく外反し端部が肥厚するので磨消縄文は2本沈線で幅が狭い。その特徴から見て前者は福田KII式古段階または中津III式、後者は福田KII式併行のものと考えられる。また、4は小片であり細かい検討はできないが、縁帶文土器と思われる。このように見ると、第1トレンチ出土の縄文土器は後期前葉の比較的限られた時期のものと言えよう。

これに伴う粗製土器は二枚貝条痕で調整されたものを主体とすることが特徴で、底部はやや上げ底気味となるものが多い。また、少数ではあるが口縁端部に刻みが付されたものも見受けられる。石器は組成が検討できるほど出土していないが、サヌカイト・黒曜石のように他地域から搬入されたものに加え、安山岩～流紋岩のような石材も使われている。

中祖遺跡が所在する福波地区は、これまでほとんど原始・古代の遺跡が知られていなかった地域である。今回の発掘調査は極めて限定されたものであったが、図らずも縄文時代後期から営まれた砂丘遺跡を確認することができた。また、Ⅲ区の本調査では石見部では確認例が少ない瓦葺き礎石建物跡が検出されるなどの成果もあがっており、今後この地域の調査が進むことで、より豊かな石見の原始・古代史像が構築されていくことが期待される。

註

- (1) 角田清美「山陰海岸・江津砂丘地帯の地形」「高地性集落と倭國大亂」小野忠熙博士追記記念出版事業会編 緑山閣 1984年
- (2) 田中義昭・吾郷和宏ほか『大平山遺跡群調査報告書』江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988年
- (3) 宍道正年『島根県の縄文式土器集成』I 1974年
- (4) 註(3)と同じ。
- (5) 三宅博士・広江耕史ほか「仁摩・坂瀬遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第33集 島根県教育委員会 1987年
- (6) 江津市教育委員会発掘調査。

福波小学校所藏遺物觀察表

埠固番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	調査・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3 - 1	縄文土器	深鉢	(19.0)	-	外面：条痕 内面：2枚貝皿底	3mm大の砂粒含む	普通	外面：暗褐色 内面：灰褐色	
3 - 2	縄文土器	深鉢	-	-	内面：ナデ？ 外面：ミガキ	1-2mm大の石英含む	良好	暗灰褐色	福光津地区出土
3 - 3	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ	2mm大の石英含む	良好	外面：灰褐色 内面：暗褐色	福光津地区出土
3 - 4	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ	2mm大までの砂粒含む	良好	灰褐色	縄文部赤陶器益香福光津地区出土
3 - 6	弥生土器	壺	(16.0)	-	外面：横ナデ・ハケメ 内面：ハケメのちナデ？	細かい砂粒含む	普通	外面：灰褐色 内面：淡褐色	
3 - 7	弥生土器	壺	-	-	外面：横ナデ 内面：ナデ？	2mm大までの細い砂粒含む	良好	外面：青褐色 内面：淡褐色	福光津地区出土
3 - 8	弥生土器	壺	-	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ	2mm大までの砂粒含む	良好	外面：青褐色 内面：灰褐色	近世有田器
3 - 9	瓦	平瓦	-	-	下面：横目タタキ	2mm大の石英含む	良好	暗青灰色	須恵質燒成
3 - 10	瓦	熨斗瓦・隅切瓦	-	-	上面：ナデ 下面：ナデ	1mm	良好	暗褐色	

中祖遺跡出土土器・陶器器観察表

埠固番号	調査区	出土地点	層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	調査・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
6 - 1	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	(17.0)	-	外面：縄文・ミガキ 内面：ナデ？	4mm大までの石英含む	やや不良	灰褐色	
6 - 2	Ⅱ	T1	-	縄文土器	洗鉢	(15.8)	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ？	1mm大までの石英含む	良好	茶褐色	
6 - 3	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	4mm大の石英含む	良好	茶褐色	
6 - 4	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	3mm大の礫含む	良好	灰褐色	
6 - 5	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	4mmまでの礫含む	良好	暗褐色	
6 - 6	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	細かい石英含む	良好	灰褐色	
6 - 7	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	(20.5)	-	外面：粗いケリのちナデ 内面：ミガキ	2mm大の薬母他含む	良好	灰褐色	
6 - 8	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：粗いナデ 内面：指押込みのち粗いナデ	4mm大の礫含む	良好	褐色	
6 - 9	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	4mm大までの礫含む	良好	褐色	
6 - 10	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	(15.2)	-	外面：粗いケリのちミガキ 内面：ミガキ	2mm大の石英含む	良好	灰褐色	
6 - 11	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：粗いナデ 内面：ミガキ	2mm大の薬母・石英含む	普通	灰褐色	
6 - 12	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：粗いナデ 内面：ミガキ	2mm大の石英含む	良好	茶褐色	
6 - 13	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：粗いナデ 内面：ミガキ	3mm大の薬母・石英含む	良好	灰褐色	
6 - 14	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	2mm大の礫含む	良好	淡褐色	
6 - 15	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：2枚貝皿底 内面：2枚貝皿底	4mm大の礫含む	良好	淡褐色	内面に黒斑あり
6 - 16	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：2枚貝皿底 内面：ナデ	4mm大の礫含む	良好	淡褐色	
6 - 17	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：指押込み 内面：2枚貝皿底	3mm大の礫含む	良好	灰褐色	
6 - 18	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	2mm大の礫含む	良好	灰褐色	
6 - 19	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：2枚貝皿底 内面：2枚貝皿底	5mm大の礫含む	普通	褐色	
6 - 20	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	5mm大の礫含む	良好	褐色	
6 - 21	Ⅱ	T1	3層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：粗いナデ 内面：ナデ	2mm大の礫含む 石英含む	良好	灰褐色	
6 - 22	Ⅱ	T1	5層	縄文土器	深鉢	-	-	外面：2枚貝皿底・ナデ 内面：2枚貝皿底	5mm大までの礫含む	良好	褐色	
7 - 23	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：2枚貝皿底	3mm大の石英含む	魚好	褐色	
7 - 24	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：2枚貝皿底	3mm大の礫含む	良好	褐色	
7 - 25	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：2枚貝皿底 内面：ナデ	3mm大の礫含む	良好	灰褐色	
7 - 26	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	3mm大の礫含む	良好	灰褐色	
7 - 27	Ⅱ	T1	-	縄文土器	深鉢	-	-	外面：ミガキ 内面：ミガキ	細かい石英含む	良好	灰褐色	
9 - 31	Ⅱ	T1	3層	土師器	甕	(19.4)	-	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	細かい礫含む	良好	淡褐色	
9 - 32	Ⅱ	T1	-	土師器	甕	(19.8)	-	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ	細かい甕含む	良好	褐色～淡褐色	口縁外面に焦げ付着
9 - 33	Ⅱ	T1	-	土師器	甕	-	-	外面：ナデ・ケズリ 内面：ナデ	細かい甕含む	良好	灰褐色	外面に黒斑あり
9 - 34	Ⅱ	T1	-	土師器	甕	(11.8)	-	外面：ナデ 内面：不明	3mmまでの礫含む	普通	灰白色	
9 - 35	Ⅱ	T1	-	土師器	甕	(12.8)	-	外面：ハケメのち横ナデ 内面：ハケメのち横ナデ	細かい甕含む	良好	褐色	
9 - 36	Ⅱ	T1	-	土師器	甕	(12.2)	-	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	2mm大までの石英含む	良好	褐色	
9 - 37	Ⅱ	T1	3層	土師器	甕	-	-	外面：横ナデ・ハケメ 内面：ナデ	2mm大までの礫含む	良好	褐色	

探査番号	調査区	出土地点	層位	種類	基種	口径 (cm)	高さ (cm)	調査・手法の特徴		胎土	焼成	色調	備考
								外側	内側				
9-38	Ⅲ	T1	3層	土師器	餅形器台	(19.0)	-	外側：横ナデ 内側：ケツリのちミガキ	細かい雲母含む	良好	灰褐色		
9-39	Ⅲ	T1	3層	土師器	高环	-	-	外側：ハケメ 内側：ケツリ	1~2mm大の石英含む	良好	褐色	坪部内面放射状に工具痕	
9-40	Ⅲ	T1	3層	土師器	高环	-	-	外側：ハケメ・ミガキ・横ナデ 内側：ケツリ・ハゲメ	白	良好	褐色～淡褐色	坪部詫合時の押圧痕	
9-41	Ⅲ	T1	3層	土師器	高环	-	-	外側：横ナデ・ハテヌ 内側：ケツリ・横ナデ	留	良好	暗褐色		
9-42	Ⅲ	T1	3層	土師器	高环	-	-	外側：ハケメ・ミガキ 内側：ケツリ・横ナデ	細かい雲母・石英含む	良好	暗褐色		
9-43	Ⅲ	T1	3層	土師器	低脚環	-	-	外側：不明	留	普通	淡褐色		
9-44	Ⅲ	T1	須恵器	坪蓋	-	-	-	外側：圓筒のちケツリ 内側：須恵ナデ	2mm大の石英含む	良好	外側：青灰色 内側：淡青灰色	外側に光沢のある自然釉	
9-45	Ⅲ	T1	須恵器	坪蓋	-	-	-	外側：須恵ナデ	3mm大の礫含む	良好	黃灰色	外側に光沢のある自然釉	
9-46	Ⅲ	T1	須恵器	坪蓋	-	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	2mm大の礫含む	良好	暗青灰色	つまみ内面剥がり	
9-47	Ⅲ	T1	須恵器	坪蓋	(13.4)	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	留	良好	青灰色		
9-48	Ⅲ	T1	須恵器	坪蓋	(13.6)	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	2mm大の石英含む	良好	青灰色		
9-49	Ⅲ	T1	須恵器	坪身	(12.6) (3.9)	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	5mm大までの礫・石英含む	良好	外側：暗青灰色 内側：青灰色	外側：暗青灰色 内側：青灰色	
9-50	Ⅲ	T1	須恵器	坪身	(13.0)	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	留	良好	青灰色	重ね焼き痕	
9-51	Ⅲ	T1	須恵器	坪身	-	-	-	外側：白陶ナデ・西軸未切り 内側：須恵ナデ	1mm大の石英含む	良好	暗青灰色～褐色	重ね焼き痕	
9-52	Ⅲ	T1	須恵器	蓋	(14.2)	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	留	良好	外側：暗青灰色 内側：青灰色	外側：暗青灰色 内側：青灰色	外側に自然釉 別個体付属
9-53	Ⅲ	T1	須恵器	蓋	-	-	-	外側：白陶ナデ・平行タスキのちカギメ 内側：須恵ナデ・西軸未切り	2mm大の石英含む	良好	外側：暗青灰色 内側：青灰色	外側：暗青灰色 内側：青灰色	外側に灰けり
9-54	Ⅲ	T1	須恵器	蓋	-	-	-	外側：白陶ナデ 内側：須恵ナデ	留	普通	青灰色		
9-55	Ⅲ	T1	瓦	平瓦	-	-	-	外側：ケツリ・布目 内側：織目タキ	2mm大までの礫含む	不良	灰白色		
9-56	Ⅲ	T1	3層	土師器	蓋	-	-	外側：白陶ナデ・西軸系切り 内側：須恵ナデ	4mm大の茶色縦 多く含む	良好	外側：淡褐色 内側：灰褐色	底径5.5cm	
9-57	Ⅲ	T1	土師器	蓋	-	-	-	外側：白陶ナデ・延軸系切り 内側：須恵ナデ	留	良好	淡褐色	底径4.7cm	
9-58	Ⅲ	T1	土師器	蓋	-	-	-	外側：白陶ナデ・圓軸系切り 内側：須恵ナデ	留	良好	淡褐色	底径3.7cm	
9-59	Ⅲ	T1	3層	備前	宿鉢	-	-	外側：須恵ナデのちナデ 内側：須恵ナデのち留目	2mm大の石英他 含む	良好	灰褐色	下半を中心で消耗顯著	
9-61	Ⅲ	T1	湖戸	水滴	-	-	-	外側：留	留	良好	灰褐色	外面に縁飾	
10-1	Ⅲ	T2	土師器	高环	-	-	-	外側：ハケメ 内側：	細かい雲母含む	良好	褐色		
10-2	Ⅲ	T2	須恵器	坪身	-	-	-	外側：圓軸ナデ 内側：	留	良好	青灰色		
10-3	Ⅲ	T2	土師器	土鍵	-	-	-	外側：	留	普通	淡青褐色		
10-4	Ⅲ	T2	備前	宿鉢	-	-	-	外側：横ナデ 内側：須恵ナデのち留目	5mm大の礫含む	良好	紫褐色	下半を中心に消耗	



中祖遺跡遠景（東上空から）



中祖遺跡近景（東から）



第1 トレンチ調査前（南東から）



第1 トレンチ調査後（西から）



第1 トレンチ土層（南東から）



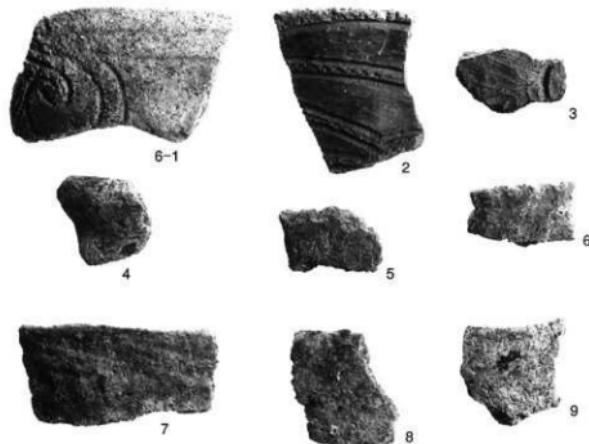
第2 トレンチ（南から）



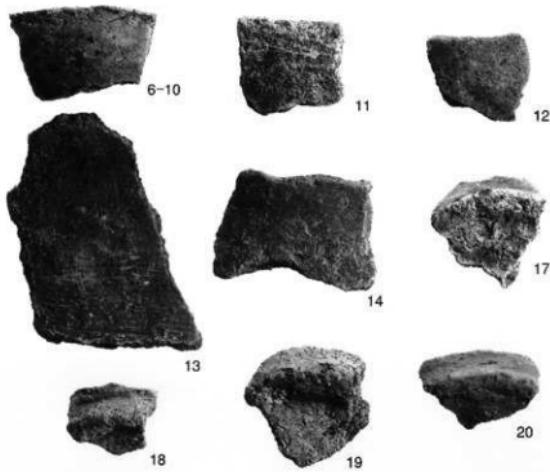
第2 トレンチ土層（東から）



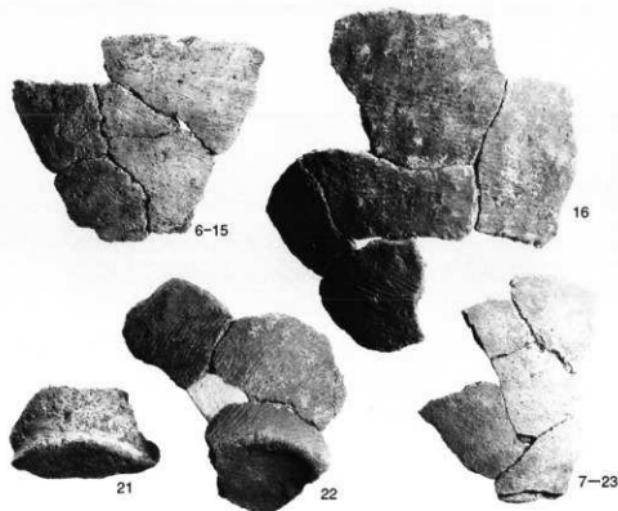
第2 トレンチ土坑検出状況（南から）



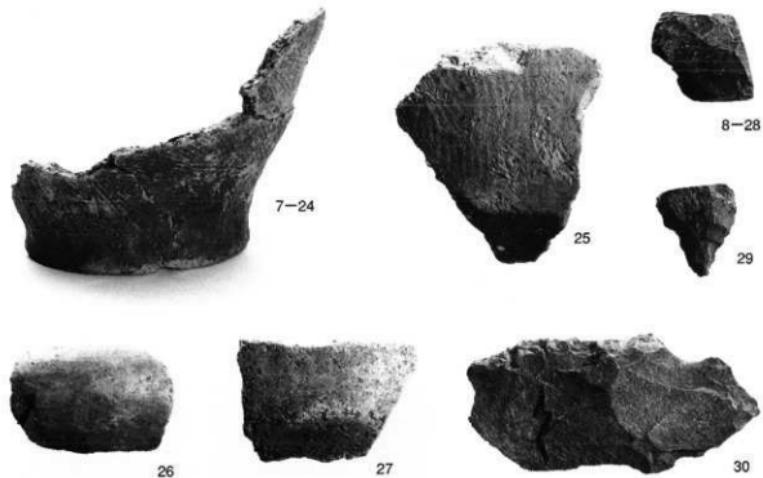
第1 トレンチ出土縄文土器 (1)



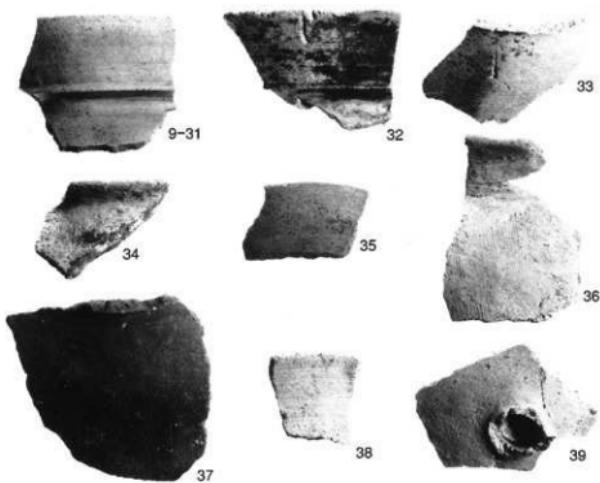
第1 トレンチ出土縄文土器 (2)



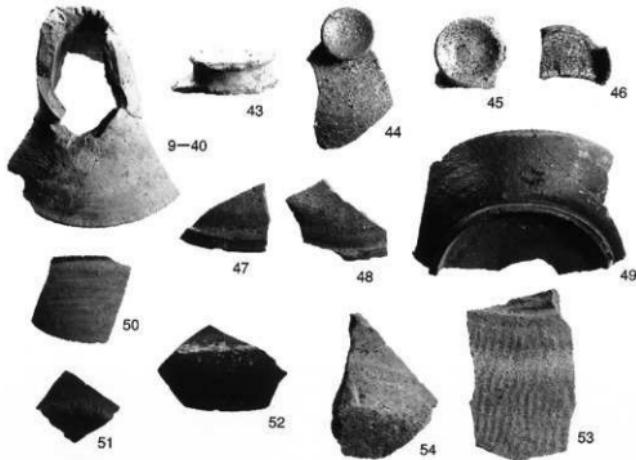
第1 トレンチ出土縄文土器 (3)



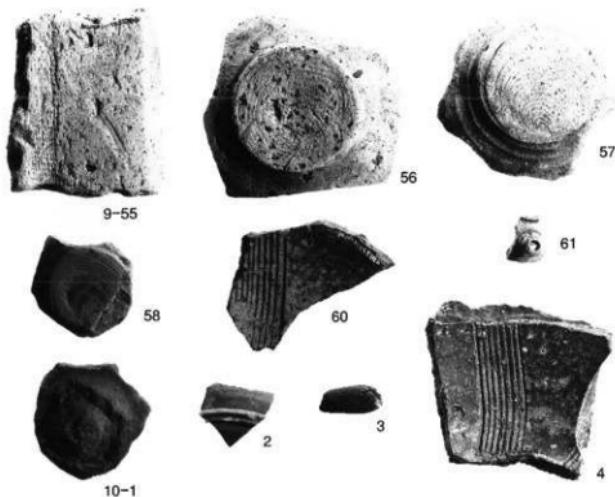
第1 トレンチ出土縄文土器・石器



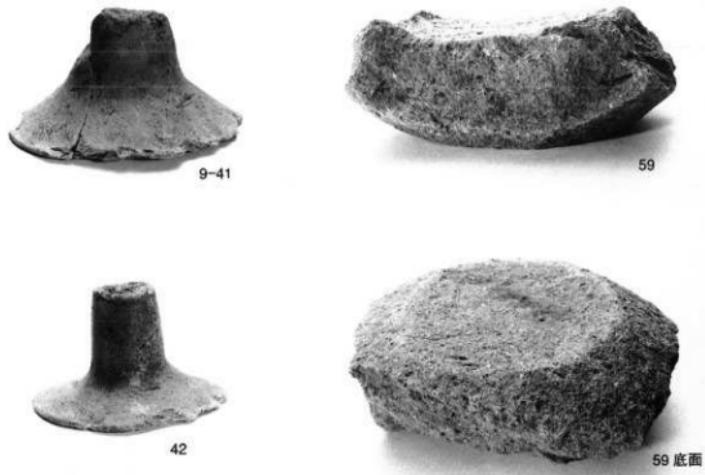
第1 トレンチ出土土器



第1 トレンチ出土土器・須恵器



第1・2トレンチ出土布目瓦・土師器 他



第1トレンチ出土土師器・石鉢

報告書抄録

フリガナ	ナカソイセキハンイカクニンチョウサホウコクショ							
書名	中祖遺跡範囲確認調査報告書							
副書名	平成18年度詳細分布調査に伴う遺跡範囲確認調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	角田徳幸							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.lg.jp/section/maibun/							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL: 0852-36-8608 maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 *	東経 *	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中祖遺跡	島根県	32205		35°	132°	20060710		範囲確認調査
	大田市			04'	19'	~	60m ²	
	温泉津町			25"	58"	20060725		
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中祖遺跡	集落遺跡	縄文時代				縄文土器・土師器・須恵器・布目瓦・陶磁器・石鉢		砂丘遺跡、クロスナ層に遺物を含む。
		古墳時代						
		奈良時代						
		平安時代						
		室町時代						
		江戸時代						
要約	砂丘縁辺部に形成された遺跡である。遺物包含層であるクロスナ層が2枚あり、下層から縄文時代後期前葉の遺物、上層から古墳時代から奈良時代を中心とした遺物が検出された。調査契機となった古代の礎石建物跡の広がりは確認できなかった。							

*世界測地系による

平成18年度詳細分布調査に伴う遺跡範囲確認調査報告書
中祖遺跡範囲確認調査報告書

2007年3月

発行 烏根県教育委員会
編集 烏根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 烏根県松江市打出町33番地
<http://www.pref.shimane.lg.jp/section/maibun/>
印刷 渡部印刷株式会社